

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	田邊 恵子
論文題目	「一冊の、ささやかな、本」 ヴァルター・ベンヤミン『1900年ごろのベルリンの幼年時代』研究
審査要旨	
<p>ユダヤ人思想家ベンヤミンの回想録『1900年ごろのベルリンの幼年時代』(1932-38)は、亡命期に改稿が重ねられたために、1980年にパリで決定稿が発見されるまでは未完の断章の集積とみなされ、記憶論やメディア論などに取り込みやすい特定のテキストばかりが取り上げられてきた。本博士学位請求論文の意義は、歴史批判版全集刊行前の時点で入手できる最新のテキスト校訂の成果を踏まえて、国内外の先行研究に見られるこうした偏向を是正し、『幼年時代』を全30編の断章からなる「一冊の、ささやかな、本」として構想したベンヤミンの真意に迫っている点に見出される。</p> <p>ジュリアート、ペテス、リントラー、鹿島、前田、森田らの膨大な量に及ぶ内外の研究成果を見通しよく整理した本論文は、初期稿『ベルリン年代記』(1932)からパリ決定稿(1938)にいたる7年間の改稿過程を書簡や証言などの関連資料から再現し、ベンヤミンの改稿の意図が個人史的痕跡と視覚的要素の削除にあることを明確にしている。特にギーセン稿(1933)とパリ稿の比較検討に力点を置いて「回想＝叙述方法」、「主人公子ども」、「メディアとしての本」という三つの観点から『幼年時代』の改稿過程が分析される。『幼年時代』を自伝として読む妥当性を問い直す第一部では、ブルジョアの子供のうちに沈殿する「大都市の経験」という匿名的な記憶を問題にするベンヤミンが、作者と主人公の同一性と出来事の因果律的単線性を前提とした伝統的な自伝に無効を宣言し、主観を抑制したうえで記憶の細部へと接近する意図的な方法を編み出したとされる。主語「わたし」の中に回想主体と回想の対象である子どもが重ねられることで、一方で、構築された幼年時代のイメージは絶えず現在の視点から自己言及的に介入されるし、他方で「散歩/遊歩」を通じて都市空間のなかに過去の痕跡を発見しようとする回想主体も、視覚の優位を排して都市の「雑音」を感受できる不器用な感性を子どもから学びとらなければならない。このようにして『幼年時代』における想起作業が過去と現在、子どもと大人との間の弁証法的な運動によって支えられていることが解明される。</p> <p>回想主体が戦略的に学びとるべき子供の不器用さをさらに詳細に検討する第二部では、ブルジョワ家庭のインテリアに触れる子どもの遊びに、プリミティヴな擬態や言語能力の未熟さから生じる誤解に、ベンヤミンが通例とは異なる価値を生み出す創造性、社会化および分節化以前の世界へと遡及する可能性まで読み取っていたことが示される。そして因果律を破壊する子どもの遊びが『歴史の概念について』における歴史叙述論と関係づけられ、『幼年時代』は個人の記憶を「複数的な物語」へと押し広げる反＝歴史主義的な試みであると結論づけられる。『歴史の概念について』の「歴史の天使」が暴力的な「進歩」＝「破滅」の過程を眺めることしかできないのに対して、『幼年時代』の子どもには、世俗に留まり、その前言語的な「遊び」によって、打ち捨てられた記憶を再度「組み合わせる」可能性までであるとして、より積極的な意味づけがなされている。</p> <p>以上を踏まえた第三部では「一冊の、ささやかな、本」という構想の歴史的な意義が検討される。写真や映画といった最新メディアを重視したベンヤミンが、「本」という古典的な形式へ回帰するのは矛盾に見えるが、通常の歴史叙述に取り上げられない「取るに足らない事柄」を回想し、個人的痕跡を削除した『幼年時代』は、亡命を強いられた者たちのための一種のノアの方舟として構想されたのだと論じられる。最新の研究にあつては、戦後直後に編纂されたアドルノ版『幼年時代』はベンヤミンの最終的な意図に即すものではないとして軽視されがちだが、論文提出者によれば、作品に「その後の生」の可能性を与えた点は評価されなければならない。ベンヤミンが「手擦れ」による「本」の変容その</p>	

氏名 田邊 恵子

ものに価値を見出したように、アドルノ版は、不完全ながらも「復活」＝「その後の生」の道を示した。こうして「一冊の、ささやかな、本」としての『幼年時代』は、その「ささやかさ」ゆえに変容の可能性を秘めた、来るべき読者のために残された「本」だと結論づけられる。

以上のように明快な論旨を持つ本論文に対して、公開審査会では膨大な先行研究を巧みに整理整頓する手腕、複数稿の文献学的調査研究の堅実さ、そしてベンヤミン研究の欠落部を埋める洞察の新しさについて三名の審査員全員から一致して賞賛の総評が出された。口頭試問では、いくつかの疑問点が指摘されたが、大きく分けて以下の三点にまとめられる。まず「一冊の本」というコンセプトを強調し、改稿過程における巻頭と巻末の作品選択の変化とその意義については十分に論じられているものの、三〇編全体の美学的構成についての分析に物足りなさが残るとの意見が出た。これに対して、子供の不器用さを真似して、視覚の優位性を覆す戦略をとるベンヤミンは、整序よりもむしろ錯乱を構成原理にしているのだという説得的な説明があった。第二に、歴史の進行に対抗する「不器用さ」の積極的な効用を強調するあまりに幼年期を狭く限定して捉えているのではないか、狭義の幼児期ばかりでなく、青年期の性の目覚めなども取り込まれているし、テキストには屠殺された獣のイメージなど死や暴力のイメージも頻出しており、こうした部分が切り捨てられているのではないか、という指摘があった。これに対して、これらの要素は改稿過程で削りきれずに残った余剰である可能性を指摘しつつも、論文が『幼年期』を分析するために限定したパースペクティブを取らざるを得ず、『幼年期』の可能性の広がり全てに同等に配慮することは叶わなかったもので、これらの点については、博士論文の成果を踏まえつつ個別論文の形で取り組んでいきたい旨の応答があった。最後に、『パッセージ論』などベンヤミンの思想世界全体、ひいてはユダヤ神秘思想、技術論、インファンティア論など近現代思想史全体や同時代の言説のなかにどのように本作が位置づけられるか、などの質問が出た。これらに対する応答も、論文提出者がベンヤミン研究史や近代思想史に関して幅広い知識を有していることを明らかにしており、本学位請求論文において対象を狭く限定したのは論の精度をあげるための戦略的な選択であったことを改めて審査委員全員に納得させた。論文が画定した境界を越えた先を問う質問が出たこと自体が、論文提出者が今後のより大きな規模の研究の出発点となる橋頭堡を本学位請求論文によって構築しえたことの証左だといえる。試問後の別室での投票の結果、子供の遊戯性や誤読を手掛かりに複数形の物語を提示することで、世紀転換期の市民階級の集合的記憶を浮かび上がらせようというベンヤミンの戦略を明らかにした本研究は、研究史上の欠落部を埋めるばかりか、今後の発展を大いに期待させるものであり、博士学位を授与するにふさわしい論文であるという判断を審査委員が全員一致で下した。

公開審査会開催日	2019年8月22日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	山本 浩司	ドイツ文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	藤井 明彦	ドイツ文化論・ドイツ語学	博士(アウクスブルグ大学)
審査委員	東京大学総合文化研究科・准教授	竹峰 義和	ドイツ思想	博士(東京大学)
審査委員				
審査委員				